

■ 授業者より

【研究の概要】

○探究型の学びとして、直山（2021）の言う「漆塗り型」の学習を進めてきた。子供たちが初めて出会った表現を何度も何度も繰り返し実践、評価、修正を繰り返していくことで表現力が高まっていくということを用意している。

○学習の流れを大きく変えることはせず、ゴールの言語活動に向けて、「表現について理解したり、練習したりする活動」と「お互いの考えや気持ちを伝え合う活動」を往還しながら学習を進めた。単元の後半に「お互いの考えや気持ちを伝え合う活動」が多くなることを想定している。

○目的を明確にしなが「パフォーマンス課題」及び「評価の指標」を子供たちとつくることで、自分事の学びとして「個別最適な学び」が実現できる。これまでの学習を基にしなが、学級全体としての達成を目指すB基準を設定し、それに加えて児童それぞれが自身の目指す姿を想定したA基準を設定した。

【本単元について】

○本単元で扱う“You can ~ in ~.” や “We have ~.” などの表現は、全て既習のものである。

○「台湾の方（交換留学大学生及び現地の小学生）に日本のことを紹介する」という文脈で、どのような表現を使うことが適切なのかを考え、取捨選択しながら聞いたり言ったり、書き写したりすることが本単元のねらいである。

○「パフォーマンス課題」及び「評価の指標」の設定後、自己の目標や課題に応じて練習を進める「リハーサル・試す活動」の充実を図った。

朝の英語	試し①
2時間目（本時）	試し②
4時間目	リハーサル①
6時間目	リハーサル②
7時間目	本番

■ 指導助言

上川教育局義務教育指導班 指導主事

久保田 竜平 様

【本時の学習から学ぶべきこと】

①表現をよりよくしていく過程において「教科書を使う」ことを児童の選択肢の中に組み入れることで、「児童が自ら教科書を使う」ようになる。このことに付随して、その他の表現にも目が向くようになる。

②子供にとって最適な学びが展開されていた。また、子供が学びを自己調整したり、練習方法や表現を選択したりする場面が数多く設定されていた。目標を自ら設定し、その目標を達成するための練習方法を自ら選択することが、「主体的な学び」の実現につながる。子供が自分で学びを進められると見通しをもつことができれば「個別最適な学び」、友達と学びたいと感じることができれば「協働的な学び」の実現につなげていくことができる。

③子供が自分で目標を決める場面が意図的に設定されていた。本時は、ダイストークや練習を経て、自己の表現を振り返り、次時以降の練習方法を決定していた。「相手にとって分かりやすい表現にしたい」と振り返った児童がいたが、これは学習指導要領「話すこと〔発表〕」イ、ウに明記されていることであった。次時以降、順番を決めたり、表現を選んだり、自分の気持ちを伝えたりすることができれば、本時のねらいに十分到達することができる。

④これまでの学習とのつながりを整理・分析し、学びが線になるように授業をデザインしていた。学年間、学校間に加え、教科・領域との関連も踏まえたカリキュラム・マネジメントを進めていた。また、獲得した知識・技能を生かすことができるように授業を構成し、主体的に学ぶ態度を時間を掛けて育てることが感じられた。

⑤CAN-DOリストを子供たち自身が活用していくことができるように進めている。子供が主語になる研究を進めているからこそ、自身の学びを振り返り、学び方を決定する場面が充実している。

■ 研究協議（主なものを抜粋）

【質疑】

○個人で決めた課題解決に向かって練習を進めていく中で、児童はどのように自分の表現がよりよくなっているのかを実感し、自己調整を図っていくのか。また、児童の習熟度や自己調整を図る様子などを教師がどのように見取り、どのような手立てを講じるのか。

→①リフレクションシートの記述に対してフィードバックする。

②4時間目の「チャレンジしてみよう①」の表現に対して、T1、ALT、JTEがフィードバックする。5時間目で再度練習し、6時間目の「チャレンジしてみよう②」につなげる。

③自分の表現を録画し、成果と課題を捉える。

○ゴールの言語活動の目的が明確であった。また、本物のコミュニケーションにつながる学習であり、学習意欲を喚起するとともに子供たちのゴールイメージにつながるものであった。「学びの地図～ラーニングマップ～」が「個別最適な学び」を実現するための手立てとしてだけでなく、「協働的な学び」の実現に向けた手立てとして考えていることはあるか。

→①自身の目標や課題に応じて選択した個別練習の成果を發揮する時間として、ペアやグループでの活動を設定している。お互いの表現を評価し合うことを通して、自己の表現をよりよくしていくことができる。

②同じ目標や同じ練習をしたいと考えている子同士で練習を進めることができる。

○「評価の指標」の「C 先生や友達をサポートを借りてできる」は、単元のゴールを到達しているように感じるが、どのような意図でCの指標を設定しているのか。

→合格、不合格という意味で指標を設定しているわけではないため、Cの達成を最終的な目標としている子供はいない。しかし、Cを明示し、共有することで、表現をよりよくしていく手段として、子供たちが積極的に「先生や友達をサポートを借りる」ようになることをねらっている。

○毎時間のルーブリックは設定しているのか？

→設定はしていない。単元のルーブリックを基に、目標の達成状況を捉えている。

○「学習の個性化」の側面でも今回の単元でねらったとはあるか。

→台湾の方（交換留学大学生及び現地の小学生）に日本の何について紹介したいか、どのような表現を用いるかを児童が取捨選択することが、「学習の個性化」と考えている。

○教科書をどのように活用しているのか。

→既習の表現を基に、文脈に合った表現の取捨選択を重視したため、教科書をあまり使わなかった。もし、教科書を活用するならば、教科書のゴールの言語活動を児童の文脈に落とし込んでいくことが大切である。

【感想】

○児童が自ら学びを進めていくことができるような授業スタイルへと転換することが求められる中で、自分を客観的に見つめる仕掛けが数多くあった。ダイストークで自分の表現の習熟度を知り、自分たちで評価の指標を設定するなど、自己と対話しながら学びを進める手立てが秀逸であった。

○小学生は文法を気にせず、プレゼンテーションにどんどん書き込むこと（入力すること）が大切であると感じた。中学生になったときに、誤った表現に気付く瞬間があるので、小さなことは気にせず、積極的に英語表現を用いてほしい。